A11

ゆるやかな繋がりを求めて

－ライフサイエンス・ライブラリアンズちば（LLC）のこれまでとこれから－

相川由紀夫[1)]、平川裕子[2)]、阿部由美子[3)]、奥出麻里[4)]
[1)]三育学院短期大学図書館、[2)]千葉県立衛生短期大学図書館、[3)]市原看護専門学校図書室
[4)]ＪＦＥ健康保険組合川鉄千葉病院図書室

１．知識社会とプロフェッショナル

現代社会をとらえるひとつの重要なキーコンセプトとして「知識（基盤）社会」という表現を目にする機会が多くなってきた。この知識社会というコンセプトの主要な提唱者であるP.F.ドラッカーは、「知識社会では、これまで経済の３要素とされてきた土地、資本、労働は二義的なものとなり、専門知識が、一人一人の人間の、そして社会の中心資源となる。（中略）しかし、個々の専門知識だけでは何も生まれず、他の専門知識と結合して、初めて生産的な存在となる。知識社会が組織社会となるのはそのためである。したがって、組織社会の担い手たるプロフェッショナルは、特定の専門知識を行為にできる形で持つだけでなく、専門外の者に対しての説明能力と、他の専門に対する理解力を持っていなければならない。さらに、組織の活動は、必要とされるどのプロフェッショナルを欠いても成立し得ないことから、プロフェッショナルの間に上下関係は存在しない。また、彼らは知識という『資本』の所有者であることから、組織に完全には依存しない。しかし、彼らには、不断に知識を維持、向上させる必要から、体系的な学習が一生のプロセスとして要求される。」[1]と説明している。知識資本主義とも学習資本主義ともいわれる状況の出現である。

２．ライフサイエンス・ライブラリアンズちば（LLC）の創設と活動

ドラッカーによって定義されたプロフェッショナルとその普遍化の実例は、私たちにとって身近な医療現場で、医師、歯科医師と連携しながらチームとして医療を提供する、保健師、助産師、看護師、診療放射線技師、臨床検査技師、衛生検査技師などのコメディカル・スタッフの働きに典型的に見ることができる。そのようなプロフェッショナルの厳しい情報要求に的確に応えることが自分たちの使命であると信じて、たゆまぬ自己研鑽に励んでいるのが、2003年に千葉で創設されたライフサイエンス・ライブラリアンズちば(LLC)のメンバーである。現在のメンバー構成は、病院図書館勤務者が約半数を占め、残り半数が看護師養成機関（大学・短大・専門学校）図書館勤務者、業者、個人などとなっている。特徴的なのは、どのメンバーが所属する図書館（室）も、専任職員１名内外の小規模図書館が多いという点である。

知識社会化の進展にともない、それぞれが所属する図書館（室）の役割の重要性は、より一層、高まっている。にもかかわらず、予算・人員の削減などにより、各種ネットワークや研修機会への参加を見送ることが多かった小規模図書館の職員同士が、お互いに声をかけあって、参加者に過度の負担をかけないで、ゆったりと和やかに語り合える場として、また、時にはメンバー相互の職務上有益な情報交換の場としてLLCは定着しつつある。会組織を持たず、世話人以外には役員も置かず、会費も実費以外には徴収せずの「ないないずくし」の会のこれまでの活動をふり返り、その将来を展望する。

---

[1] Drucker, Peter F. 2000, *The Essential Drucker on Individuals.*（上田惇生編訳『プロフェッショナルの条件』ダイヤモンド社, 2000）

参考文献：平川裕子, 阿部由美子. ライフサイエンス・ライブラリアンズちば(LLC)の設立と今後. 看護と情報. 2005 ; 12 : 23-26.